

編集室

いのちの感じ方

安芸地区医師会で、多職種が集まり災害時要支援者と共に生きる備えや行動を工夫する「安芸地区防災医療ネットワーク」の活動の中で知った、障害者自身による障害者防災・災害救援活動をしている「ゆめ風基金」からの便りが届いた。

代表理事の牧口一二氏が「コロナウイルス騒動に思う」と題して、世界の障害者や高齢者の声を伝えていた。トリアージは私たち医療者が一人でも多くを救おうとする治療手段である。いかにも「正しい」ように思われるが、ちょっと待ってほしいというのだ。

ETVテレビ『バリバラ』がコロナウイルス特番で各国から7人の障害者とリモート討論をした。イギリスの人工呼吸器を使う障害者が「治療に時間がかかる者は、自ら辞退せよと求められる酷さ。トリアージは間違っている」と発言。すかさずアメリカの若者が「私も同じ。もし感染して病院に駆け込むと、私の人工呼吸器を外して健常な患者に与えかねない空気がある」という。オランダでは「テレビで福祉系の大臣が『70歳以上の高齢者は後回しになる。もう社会の役に立てないから』と発言して大問題になった」と報告したようだ。

「一刻を争う緊急時ゆえの基準だろうが、いのちのランク分けはいらぬよナ。大臣や医師たちは社会的に責任ある立場から『……すべき』と考えるクセが身についているからだろうが、厄介なことだ。余計なことを考えず、ただ一人でも多くの命を『順番に』救うことだけに専念してほしい。それだけである」と締めくくられていた。

ため息がひとつでたら、ふと私が勝手に感性の師匠と仰ぐ2014年2月に104歳で

亡くなった詩人まど・みちお氏を思った。『いわずにおれない』(2005年、集英社)に出会って以来、この人のように縁あって出逢っているひと・ものすべてと真心で関わり合えたら皆幸せに生きれるだろうなあと憧れている。

有名な『ぞうさん』の詩では、〈ぞうさん/ぞうさん/おはながながいのね〉といわれた子ゾウについて、われわれ情けない人間だったら、きっと「お前はヘンだ」と言われたように感じるでしょう。ところが、子ゾウは褒められたつもりで、うれしくてたまらないという風に〈ぞうよ/かあさんもながいのよ〉と答える。それは自分が長い鼻をもったゾウであることをかねがね誇りに思っていたからなんです。小さい子にとって、お母さんは世界中、いや地球上で一番。大好きなお母さんに似ているじぶんも素晴らしいんだと、ごく自然に感じている。つまり、あの詩は「ゾウに生まれてうれしいゾウの歌」と思われたがとるんですよ。

〈すばらしいことが/あるもんだ/ノミが/ノミだったとは/ゾウではなかったとは〉と自然がやってくださる大きな恵みに感謝する。生きものがそれぞれ違い、価値がある。お互いに補い合い、助け合うこともできる。なのに、人マネごっこばかりやとる。人と自分を比べては一喜一憂したりするが、それは本当に滑稽で悲しい、そして何より、もったいないことだと思う。自分が自分であること、自分として生かされていることをもっともっと喜んでほしいと語っておられる。コロナさんのお蔭に感謝して久しぶりに読み返してみよう。

(魚谷 啓)

広島県医師会速報 2020年(令和2年)10月25日

- 発行所／一般社団法人 広島県医師会 〒732-0057 広島市東区二葉の里三丁目2番3号 TEL:082-568-1511 FAX:082-568-2112
広島県医師会HP <http://www.hiroshima.med.or.jp/> E-mail:kouhou@hiroshima.med.or.jp
- 編集者／広島県医師会会長 松村 誠
(広報委員)豊田 紳敬、上野 宏泰、加世田ゆみ子、加藤 誓、河村りゅう、先本 秀人、田中 民江、
谷 充理、津田 敏孝、西江 学、岩崎 泰政、平尾 健、正岡 良之
- 印刷所／レタープレス株式会社 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809番地の5 TEL:082-844-7500 FAX:082-844-7800